

**京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書**

平成27年6月19日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会長 辻 井 昭 雄 様

所属部局 生命科学研究所

職 名 助 教

氏 名 糸 田 昌 宏

助成の種類	平成27年度 ・ 研究成果公開支援 ・ 国際会議開催助成			
事業内容	第14回京都大学-国立台湾大学-筑波大学合同国際ミニシンポジウム「分子細胞生物学」の開催			
開催期間	平成27年 6月11日 ～ 平成27年 6月13日			
開催場所	京都大学iCeMS本館大セミナー室			
参加者	総数	内訳		
	79名	国内:44名 国外:35名		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()			
会計報告	事業に要した経費総額	2,246,976 円		
	うち当財団からの助成額	700,000 円		
	その他の資金の出所	(機関や資金の名称) 参加者自費、国立台湾大学・筑波大学・ 京都大学生命科学研究科経費		
	経費の内訳と助成金の使途について			
	費 目	金 額 (円)	財団助成充当額 (円)	
	旅費交通費	1,231,314	134,000	
	会場・会議費・消耗品費	303,037	196,300	
	その他(招待者宿泊費等)	469,700	369,700	
レセプション・エクスカーション費	242,925	0		
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 本国際会議への助成を頂き深く感謝いたします。また、採択から開催までの日数が短かったことをご考慮いただき、採択後非常に迅速に助成金の交付を手配していただいたおかげで、資金面で支障をきたさずに運営が行えました。このように個々の事情を勘案した、弾力的で実質的なご支援・ご対応をいただくことは、手間の多い国際学術会議の開催にとって非常に助けになるものでした。重ねてお礼申し上げます。			

成果の概要／糸田昌宏

平成 27 年 6 月 13 日、京都大学 iCeMS セミナー室において、第 14 回京都大学－国立台湾大学－筑波大学合同国際ミニシンポジウム「分子細胞生物学」（以下、「本シンポジウム」と略記）を開催しました。本シンポジウムは、2005 年より生命科学系の部局間で協同して英語遠隔講義を提供している三大学が、相互に訪問してシンポジウム形式で学術交流を行っているもので、今年で 10 年目にあたります。国立台湾大学からは教員 3 名と学生 20 名、筑波大学からは教員 4 名と学生 5 名の、計 32 名が訪問しました。訪問期間は 6 月 11 日から 14 日の 4 日間であり、その間に、合同英語講義を行ったり、歓迎会やツアーを開催したりして人的・文化的交流を行いました。また教員間では、国際交流に関するミーティングを行い、国際交流事業の現状や展望を共有して、今後の交流の具体的なスケジュールを検討するとともに、将来のより密な連携に向けて協力を深めることを確認しました。

6 月 13 日に開催された本シンポジウムでは、若手教員による招待講演 6 題と、学生による口頭発表 8 題、ポスター発表 39 題の、計 53 題の研究発表が行われました。参加者の総数は 79 名で、その内訳は、日本国内から 44 名、国外から 35 名でした。この人数は過去の開催と比べても多いものであり、持続的に交流を行ってきた成果と、貴財団の助成を得て多くの来訪者を招聘できたことに依るところが大きいものと考えます。開催の主体である日本と台湾以外からも、中国・米国・フランス・ロシア・オランダ・韓国・ベトナム・フィリピン・マレーシア・ナイジェリアといった多彩な国籍の研究者や学生が参加しました。

本シンポジウムは「分子細胞生物学」という比較的大きな枠組みで行っていることもあり、発表内容は、分子レベルの構造や動態解析から、ウイルス感染応答・癌制御・新規薬剤や診断法の探求など、多岐に渡るものでした。このように基礎研究から応用・臨床に至るまでの多様な専門興味を持つ研究者が一堂に会する機会は大変貴重であり、分野横断的な議論が盛んに行われました。中でも、招待講演においては、国立台湾大学の Shih-Kuo Chen 博士による網膜神経節細胞の光応答メカニズムに関する研究や、筑波大学の須田恭之博士の酵母のゴルジ体の動態を最新の顕微鏡手法で詳細に解析した研究など、優れた研究が報告されました。学生による一般口頭発表においても、トポイソメラーゼ 3 α による新規の癌抑制機構を解析したものや、次世代シーケンサーを用いて耐塩性バクテリアが高塩濃度環境に適応する仕組みの解明に取り組んだものなど、斬新な切り口からなる興味深い研究が数多くみられました。ポスター発表においては、全員の発表をしっかりと把握して交流を深めたいという過去の本シンポジウムの要望から、ポスター前で一人一人に 2 分程度で研究内容を紹介してもらう時間を設けました。短い時間ではありましたが、ポスターを貼りっぱなしで発表者の顔も知らずに終わってしまうこともある一般的なシンポジウムと比べて、よりインタラクティブで実質のあるセッションになったと感じています。学生は、短い時間での発表に戸惑ったり、緊張のため全く思ったようなことが言えないという例もありましたが、参加者からの評価に満足したり自分の研究への自信につながった者も多く、研究の要点を簡潔に相手に伝えるいい教育機会になったものと思います。

今回の本交流事業では、期間を通じて非常に活発な交流が行われました。各大学間では遠隔講義を通じてすでに顔見知りも多く、心理的な距離感は非常に近くなっています。そのため、多くの発表において、発表後の質疑の時間に、悪い意味での遠慮がない、非常に活発な議論が交わされました。全ての発表に対して5分間という比較的長い質疑時間を確保していたにも関わらず、中には6人7人と質問者が続き、時間が延長されたり質問を打ち切ったりすることもありました。また、ポスター発表においても同様に、学生と教員、あるいは学生同士で、ポスターを前にして長時間活発な議論を交わしている様子が見られました。

本シンポジウム後に行われたレセプションパーティーでは、口頭・ポスターの発表賞が表彰されました。評価は、参加している複数の教員による採点評価の合計で行われました。優れた発表が多く激しい競争となりましたが、修士の学生であっても研究の面白みがしっかりと説明できてかつ論理的な組み立てができている発表が多数あり、その中から受賞者も出たのが印象的でした。また、前回や前々回の本シンポジウムに参加していた学生でこれまで受賞していなかったものが、今回初めて受賞することとなったケースもあり、この交流事業を継続して行っていることの意義が感じられました。今後もこのような取り組みを継続して行くことで、本学学生の人的・学術的国際交流の機会を提供すると共に、生命科学系の発展に貢献したいと考えています。

最後に、本シンポジウムの開催にあたっての京都大学教育研究振興財団からの助成に、深く感謝申し上げます。



参加者集合写真